

家庭科の男女共修をすすめる会

※発行日 '74. 8. 10

※連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11

一部 50円

婦選会館内

TEL 03-370-0238

『家庭科の男女共修をすすめる会』集会報告

第二回集会実践報告

「私は中学の家庭科男女共修の内容をどの
ようにすすめているか」

四月二十八日 PM 1・30 ~ PM 4・30

婦選会館

○報告者 鯨井あや氏(元新宿区落合二中
教諭)

まず、事務局から、教育課程審議会委員や、
東京都教育委員とのインタビューの様子や、
都の家庭科の先生へのアンケート結果が報告
されて、すぐ実践報告にうつった。(7P参照)

都合二中では、週三時間の技術・家庭の授
業のうち、一年生の一時間だけ、男女共修で

家庭科をすすめており、鯨井先生が、六週間
この実習の中で、生徒たちは、「市販のジ
ュースは体にいいかどうか」を考え、「手
作りのジュースのおいしさ」を知ることから、
食品の体へのえいきようを考える
食品への関心をもち、自ら調査する

◎『家庭科の男女共修をすすめる会』 集会報告

△第二回集会 実践報告「私は中学の
家庭科男女共修の内容をどのよう
にすすめているか」

△第三回集会 注目された京都等の共
修実践報告

◎家庭科指導主事に対する男女共修につ
いてのアンケート

◎中・高家庭科男女共修についての現
場教師に対するアンケート結果

◎賛同者のアンケート調査から
◎関係の方々を訪ねて

◎日誌メモ
◎会の宣伝活動……これまで

◎会計報告

(六時間)かけて、実践された授業の報告は、
だいたい次のようであった。

授業のねらいは

・健康を守り、発展させる食生活

・生活の中の矛盾を発見する家庭科教育

・子どもの要求をとりあげて、身近かな

問題からの学習。の三点で、生徒と

・商品の正体を追求する

・有害・うそつき商品に対して、生存権を守る行動に発展していく

などの姿勢を、養うことができた、というのが鯨井先生の結論であった。

この実習のあと、子どもたちは、家でも、手作りのジュースを、家族のみんなに飲ませ、遠足には、カン入りのジュースをもっていくことをやめよう、と決めるなど、以前と変わった食物への視点をもつようになった、という。実践報告のあと、質疑と討論にはいった。会場から、

・合理主義・技術主義を単に批判するだけでいいのか。

・評価の方法はどうしたのか、生活の主体者として、必要に応じて、市販のもの、手作りのものを選択して、使いわけの姿勢ができたかどうか、こそ評価の基準となるべきではないか。

・なぜ、夏みかんをジュースにしなければならぬのか。そのまゝ食べるのでもいいではないか。

などの疑問が出され、鯨井先生の応答と共に、会場からも、単に、ジュースを作る技術の学習ではなく、男の子にも食物への関心を

もたせたこと、暑い季節に、つい市販のもの

に頼りがちな飲みものを、身近かな果物から自分で作り、純粋なものを多量にとることを、楽しんでやれたこと、市販食品中心の生活へのアンチテーゼとして、単純なことのようにだが、意味があること、などの評価が出された。

そのあと、これからの共修をすすめる運動の中で、まず何が問題点か、を話し合った。

①学校教育の制度上の問題として

・男女別学の中で、家庭科には、教師にさえ一定の劣等感が身についてしまっている。

・中学の技術・家庭科では、小学校の共修家庭科とのつながりが断たれている

・中学では、技術と組み合わせになつていくために、高校以上に共修に困難がある

・高校の女子のみ必修の問題点

などがあげられた。

②共修の必要性の理念の確立

問題を指摘するのみでなく、なぜ共修が必要なのか、をはっきりさせることが大切だと、いう点に話がすゝみ、

・女性の就労が多くなった現代、男性の家事能力を向上させることが必要

・婦人解放の視点から、男女差別の解消に向う、ひとつの方策として必要

・別学による家庭科軽視は、生活軽視につながる。生活の主体者としての自覚を、男女ともにもたせるために必要

・合理主義・技術主義万能の現代の風潮に對するアンチテーゼとして必要

・男性の、生活者としての感覚の欠如が生み出した、生産中心の公害を生みやすい体質改善のために必要

など、さまざまな意見が出された。

・共修——何を教えるか。

以上のような理念にもとづき、共修をすすめるとしても、具体的に、何をどのように教えるかを考えよう、という段階にすゝみ、

・今のままの家庭科の内容ではナンセンスで、家庭科廃止につながっていく

・今の家庭科の中から、不要なものを切り捨てる作業（例えば、単なる家事技術の学習）と、必要なものを組み立てていく

作業を共に行わなければならない。

・技術は不要とはいえない。生活技術の中心になる、心と体のすべてを合理的に使って行う学習は、暮らしの哲学をうちたてるのにぜひ必要である。

・公害への視点は、ぜひとも盛り込まねばならない。

・男女差別の解消にむかっただけの女性解放の

視点からの教材は不可欠である。

など、多くの意見が出たが、具体的な内容には、なかなか発展していかなかった。そこで半田たつ子氏から、すでに高校の共修カリキュラムができ、四九年度（一部は四八年度から）実施されている京都の「家庭一般」の指導資料の概要紹介があった。

おかげで、具体的なカリキュラムのイメージがだいぶんはっきりしてきて、内容や教材を考えるには、まずすでにあるものを基本として考えるのが先決である、と意見がまとまり、次回までに、京都の「家庭一般」指導書を取り寄せ、実践をしている方を招いて、説明をしてもらうこととし、資料購入の希望申込を取った。

次回は、京都の共修資料の説明と、中学校での共修実践の報告をさらにもうひとつとしていただくことに決めて、討議を終った。

なお、教育課程審議会委員、東京都教育委員などに、ひきつゞき発起人がインタビュウしていく計画を発表し、署名や、カンパへの協力をお願いして、散会した。

注目された京都等の共修実践報告

——六月二日検討集会——

前回（四月二〇日）の集会で示された、男女共修家庭科の実践例に対する強い関心を受けて、六月二日（土）、中・高の実践報告と検討の集会が持たれた。とくに、今回は、京都府の高校の実践が報告されることが、ひとつの焦点であった。

集会は、いつものように婦人会館（代々木）を会場に、司会半田・駒野氏で一時半頃より開始。まず前回に引き続き、東京都の家庭科教師（中・高）及び都道府県・特別市の家庭科指導主事に対して行われた「家庭科男女共修についての意見と見通し」のアンケート結果が補足され、現状はともかく、将来の共修への強い関心と期待が報告された。

次に、梶谷氏から教育課程審議会委員への訪問活動が紹介され、今回の訪問者松尾優文子氏（主婦・元武蔵野市教育委員）に、教課審の大まかなスケジュール（月二回程度会を持ち、昭和五十年年度中に教育課程改訂を答申予定）を伺い、また、「家庭科の男女共修をすすめる会」として主旨を説明、協力を要望した旨報告があった。

続いて、司会の駒野氏から、実践報告に先だって、前回の集会の経過と今回の集会へ発展した主旨のべられ、実践報告に入った。この頃には、会場は満席、隣室も解放して熱のこもった集会になった。

☆中学校の共修実践「パンツの製作」

ご承知のように、中学校の家庭科は「技術・家庭科」となっていて、（男子向き）（女子向き）に分かれ、男子は技術科、女子は家庭科的な内容を別々に学習している。各地に、男女を一部でも共修にしようと努力している学校もあるが、地域全体が共修を制度化しているところはない。本日の船越立子氏（文京区立第十中）も、校内の理解を得て、一・二学年時に週一時間づつ共修を試みているケースである。

氏は、教職歴三〇年にわたるベテランで、戦後の教育改革時に共修家庭科を実践した経験者でもある。読者の中にはご存知の方もあるかと思うが、「民主的的家庭科教育の創造」（家庭科教育研究者連盟編、明治図書刊）の中で紹介されている「パンツの製作」というユニークな教材を提示している。このパンツの製作を中心にした昭和四八年度の共修カリキュラムが紹介された。パンツというちよ

とユーモラスな教材について、氏は、「衣の製作学習として、単なる技能反復でなく、子どもの能力や興味を考慮しながら、基礎的知識や技能を育くむのにどんな教材がよいだろうか。上衣——これは身体の構造が複雑な部分で子どもの手に負えない。そこで、身体の構造・動作のシンプルな下半身を対象に、一番やさしいパンツを選びました。生徒は、各班で一人をモデルに、人間の動作に合わせて身体にまきつけた紙を巧みに調整し、身体↓型紙↓衣服(パンツ)の過程を認識してゆきます。班で一枚のパンツを作るだけだが、その過程の中で、始めて、身体と衣服構造との関係が理解できるのです。」と説明しておられた。

このような、生活や生活技術の構造を解明しようとする教材さえ、官製でなく、自主教材にならざるを得ない現実の厳しさがあるが、さらに、親の側の無理解が、時にはこういったじみな努力を拒否するという話をきいて、家庭科の改革のむつかしさを認識させられる。「学習経験を自分自身の生活にはねかえし、生活を自分自身で評価しうる能力をつけさせるには、原点から始めるほかならないと思うのだが……」と氏は結んだ。

☆京都府の高校二単位共修

京都府の共修実践については、前京都府家庭科指導主事である山城高校へ出られた森幸枝氏が上京、報告された。高校は、現在女子のみ家庭科四単位必修で、男子は体育を当てている。京都府は、よく知られているように、男女二単位共修を制度的に確立した唯一の自治体であり、森氏はその推進力になったわけである。

氏は、まず、共修実施への歩みが、昭和三十八年以降の高校女子必修化への批判に発し、昭和四一年以降のゆめ研究が家庭科教師に与えて進められ、それが制度改善の意欲とともに次第に結実していったこと。教師用の研究手引きとして注目された「家庭一般指導資料」(資料として販売もしてくる)は、各ブロックから出た現場教師が、それまでの研究会の成果を生かす方向で執筆したものであると紹介した。

カリキュラムの構造は、「生活と家族」「生活と経済」「生活と衣食住」の三つの柱で構成されている。「生活と家族」は、家族史や民法を題材にとりながら、「家庭生活の現状」をとりまくさまざまな問題に発し、「家族の歴史とその機能」「家庭生活と法律」

「家庭生活と職業」「保育」などの基本的な認識を深めて、問題発生の構造に迫ろうとするものである。そして、「生活と経済」では、政策の影響等を念頭におきながら、「家計の収入と支出」の現状と問題を整理し、とくに、「物価問題」「消費者問題」「社会保障」を改めて取り上げている。「生活と衣食住」は、具体的な生活事象である「食生活」「衣生活」「住生活」について、基本的な知識と最近の問題を整理している。

詳しくは資料を入手してごらん頂きたいが、生活の問題が非常に広範で複雑に入り組んでいるため、現実には教材の整理・授業方法に苦勞があるものと察せられる。その辺について、森氏は、教師が絶えず研究活動をするこ

と、そして、生徒には、現在の問題状況を自主的に把握させることによって切りぬけようとしていると話された。

さすが、共修を制度化しただけあって、森氏を始めとする京都府家庭科の先生の意欲は、聞いていてもなみなならぬものであって、森氏のクラスでは、授業前に積極的な賛意を表さなかった男子が二カ月間でかなり変化し、今では、男子の半数以上がその意義を評価する傾向にあるとの報告であった。それをきい

て一同、ほんと未来に明るさを感じたのである。(文責、佐藤)

家庭科指導主事に対する

男女共修についてのアンケート結果

「家庭科の男女共修をすすめる会」は、本年三月はじめ、四七都道府県ならびに九政令都市教育委員会の家庭科担当指導主事に対してアンケートを行なったその結果を紹介する。残念なこと、年度末の心せわしい時期とはいえ、回収率が非常に悪かった。計五六の教育委員会のうち、返答のあったのは20、答えられないという返事が2(「1」については答えられない)、1を含む)、概して東日本の返答が少ないのは、男女別学の公立高校で家庭科が安定していることが原因であろうか? 返答のあった20府県市のうち、「1」中高校の家庭科を男女共修にすることに對して賛成6(山形、栃木、滋賀、京都、広島、北九州市)不賛成1(高知)、条件つき賛成は13(青森、富山、福井、三重、奈良、島根、山口、香川、佐賀、大分、鹿児島、長崎、長野)であった。賛成6のうち、中学については「⑦技術・家庭科はほぼ現行のままとし、

共修できる領域を共修にする」3、「④内容を一部組みかえ、技術も家庭も全部共修にする」1、「②技術と家庭を別の教科とし、家庭科の内容を改めて技術も家庭も男女共修にする」1、「⑦⑧⑨⑩と段階的にすすめるのがよい」1であった。高校については、「家庭一般の内容を改善して男女必修とする」5、「現行の家庭一般の中から男女共修可能な内容を集めて男女必修とし、女子が学ぶにふさわしい内容を女子必修とする」1、さらに家庭一般以外の家庭科目について「女子のみに選択とする」0、「男女ともに選択できるようにする」3であった。

不賛成の理由は「家庭科は女子の特性に応ずる教科としての歴史を持っている。男子に教える必要はない」「男女平等や教育の機会均等が直ちに同質・同量の教育に結びつくものではない。男子にも家庭科を学ばせようとするのは誤った男女平等の考え方である」であった。

条件つき賛成の条件を多い順に記すと、「家庭科の教育内容を検討し、男女共修にふさわしいものを作り上げること」12、「家庭科本来のあり方について広く啓蒙をはかること」7、「男女共修の家庭科を教える教師を養い

成すること」5、「学習指導要領を改訂し、男女共修の家庭科とすること」3、(以下略)となる。

「(二)次の教育課程の改訂時に、あなたの都道府県市で、中高校の家庭科を男女共修にすることについて」可能1、不可能7、一部可能5、条件がそろえば可能6、わからない2であった。可能、一部可能、条件がそろえば入れると12で、返答の六割となる。

不可能の最大の理由は「遠い将来には男女共修が理想だが、まだ機が熟していない」6である。「中学校の技術・家庭男子向きをどうするか、この点の解決がむずかしい」「父・母・生徒は女子向き家庭科に強い期待を寄せているから、家庭科の性格を改める必要を認めない」「定員増・施設・設備改善など行政面の手だてができない」各2、「女子の家庭科すら不要とみられているのに、男子にまで教えるといえは強い抵抗にあり」「他教科の教師(教委関係者を含む)。父母・生徒を納得させることができない」各1。

一部可能のうち、「すでに自主的に実施している中学・高校があり、教委もこれを認めている」(青森・三重)「高校には問題が多いが、中学からなら始めることができると思

う」(栃木・長崎)「条件がそろえば」の条件としては、教師の養成、再教育、定員増、施設・設備の改善などが挙げられていた。

「(三)この運動が始まったこと、また今後の運動の進め方について」率直な意見を書いてもらった中から、代表的なものを紹介しよう。

「家庭科の体質改善の絶好のチャンス、あまり性急に押しつけることなく、ねばり強く継続することを切望。周囲からどんなに運動が盛り上っても、家庭科教師が主体にならなければ実らない。家庭科教師がかかえこむ方向でやってほしい。京都の中学校技術・家庭科の男女共修に関しては、自主的な共修の実践がもう少し広まり、一定の量的拡大ができ、行政に対して強く要求することができれば可能、高校の共修が定着する中で、高校から強く中学に働きかけるようにしたい」。

これに対して男女共修不賛成と答えた高知県の意見である。「常に新しい一歩進んだ教育を考えることはよいことだと思う。しかし、男女の特性を認め、お互いに協力して家庭生活を営む必要を大いに感ずるが、中学・高校時代に特に家庭科を学ばせる必要はないと思う。それよりもっと勉強すべきことがあると

思うし、家庭生活の中でも十分勉強できると思う。ただ女子の家庭科に関しては、もっともっと充実するよう努力するのが私どものつとめだと思う」。

以上の二つの府県の間に、さまざまな意見が存在している。

「中学の技術・家庭科を洗い直し、男女共学にするところからすすめる。家庭科は女子の教科という発想を改めて男性の家庭科教師も育てる」(栃木)

「本県では、家庭一般の裏教科として男子向き家庭一般の内容を作成し、その活用について検討しているところである」(滋賀)

「喜ばしい。日本の社会の変遷と、家庭科の歴史を背景に負ってほしい。家庭一般の内容と指導方法の検討を重ねて、できる形で、できるところから男子生徒への実施を試み、実績を積み上げる必要を痛感する」(山形)

「生活に対する基本的な考えが熟していず、家庭をプライベートな些事とする考え方の多い今日、この運動の必要性を痛感。しかし直ちに強行することは問題である」(奈良)

「条件整備して、しっかりした構えを文部省・教師自身をもってスタートすること。あわてる必要はない。あわててうすっぺらなままスタートすれば、かえって教科に関する問題を多くするのみ」

「この運動は、有能な女性を基準にしているように思う。平均的女性を対象として考えるべきである」(以上島根)

「生活の学問としての確立なしに実施することは、現在よりもこの教科を後退させる」(香川)

「男女差別からの発想に抵抗がある。組合の闘争方針として掲げると警戒されてほんとの研究ができなくなる」(富山)

「理想と現実は一一致しない。一部の人がさか立ちして情熱を示しても実現は少ない。社会的に高く評価されている男性の力が必要である」(広島)

「女子のみの教科でないことはだれにもわかる。しかし、現実には特性をふまえた判断とした差異がある」この最後の特性論を述べた指導主事は計八名であった。男女の特性と家庭教育との関係を掘り下げる必要を痛感すると共に、回答を寄せられなかった全体の2/3近い指導主事が、この問題をどう受けとめ、現場の指導に当たっておられるのかと、不審の思いを抱かずにはいられなかった。

(半田)

☆☆☆☆☆☆

中・高家庭科男女共修についての現場教師に対するアンケート結果

「会」の発起人に名をつらねながら何より気がかりなことは、現職の仲間たちからこの運動に対して積極的な意思表示がないことだった。日頃親しくしている友人も多いだけにその人たちを裏切るようなことになるのでは運動の展望も持てないし発展の見通しもないことになる。

もちろん、自主的な研究会の席上や、教組婦人部の集会などでは積極的な意見もたくさん聞いてきてはいるのだが、そうした会にも出席せず、官制研究会に出ても発言しないで帰ってしまうたくさんの仲間たちの胸のうちこそ知りたいのだ。

そんなきもちにかられて、このアンケートは「会」の名は借りたもののほとんど個人的なプランで質問紙も作ったし発送についても集計についても意欲的にとりくんだつもりである。

調査は、都内公立中、高校の家庭科教師全員を対象として、本年三月二十日ごろ春休みを目がけて自宅に発送、四月中旬まで回収されたものを集計した。

集計は、中学校、高校別、共修に対する対応別のグループに分類しておこなったが、その結果は次の通りであった。

一、回答数

中学校 七〇名(約五〇〇名中)一四四
高校 六四名(約二三〇名中)一八八

計 一三四名(約七三〇名中)一八八

回答数がきわめて少ない点に問題の複雑さがよみとれる。返信付きの封筒を同封したにもかかわらずこの数は何を物語っているのだろう。特に中学校がひどい。二〇名たらずの反応しかないということは、大多数の現場教師にとっては、もっと切実な問題が多いというわけではないだろうか。それとも答えるすべもないということなのだろうか。

二、回答内容から

1. 共修に対する賛否

共修実施校(以下Aとする)は中学校(以下Bと記す)で六校(八・五)で高校(以下Cと記す)で八校(二・五)でDでは、普通科より職業科が、全日制より定時制に多く、共修賛成者は(以下Bとする)は四三名(六一・四)C四〇名(六二・五)で差はなく「賛成、反対どちらともいえない、または反対」(以下Dと記す)は、二二名

(三〇)D一六名(二五)とBの方がやや高く、うち反対者はBに六名、Dに一名でやはりBの方が多い。しかし、反対者は全員の五割ときわめて少ないことがわかる。

2. 回答者の教歴年数別の賛否

経験年数は五年未満一七・一%、六十一〇年一二%、一一一二十年二〇%、二〇年以上四八・五%と、二〇年以上の経験者が約半数あり、Bでは特に六十一〇年が少ない点が、Cと異なり、五年未満がやや多いほかは、経験年数のバラつきに大きな差はない。これから、かなり年配者が多いことがわかる。また、ABO別にみると、Bの二〇年以上にCがやや高いことのほかは、経験年数による共修の賛否差はあまりみられない。

Bの二〇年以上というのは、かつて「共修」を経験したことのある年代であることに注目する必要がある。

3. 賛成又は反対の理由

A賛成意見の主なものをはりてみるとV
◎家庭は男女共同で営むのだから共修が当然である。B五、C一六
◎別学こそ不自然である、共修こそ自然。B一三、C二

◎共修により男女の相互理解は深まる。

- ⑦七、㊦一
- ㊦生存権の自覚、確立のため、生活に対する認識を深めるために必要 ㊦六、㊦六
- ㊦女子だけで家庭生活の責任を負うことはできない。㊦三
- ㊦男女をわける必はない。㊦四
- ㊦どちらともいえない又は反対の理由V
- ㊦よくわからぬ。㊦六
- ㊦今の内容では共修に適さない。
- ㊦六、㊦二
- ㊦男女には各々特性がある。㊦四
- ㊦学習の效果に疑問がある。㊦一、㊦二
- ㊦現在の入試体制のもとでは。㊦一、㊦二
4. 男女共修をすすめる上での困難点
この点については、ABC間にほとんど傾向の差がなかった。多いものからとり上げる
- ㊦教育課程が共修でない。六四%
- ㊦技術科との関係が不明。㊦五四%、㊦一四% ㊦三五%
- ㊦施設々備が不足。㊦二七%、㊦二〇%
- ㊦二三・八%
- ㊦教える内容に自信がない。㊦二三%
- ㊦一九% ㊦二〇・八%
- ㊦教師の負担がふえる。㊦㊦差なし一五%
- ㊦他の教師に反対がある。㊦㊦とも一四%
- ㊦父母の反対が多い。㊦㊦とも一〇%
5. 数年後の教育課程の改訂で男女共修をうち出してもらうとすれば、その前に整備せねばならないことはどんなことですか。
- この問に対してABC間に差は少なく、
- ㊦共修の内容案例をつくる。㊦八二%、
㊦八七・五%、㊦八五%
- ㊦教師の定員増。㊦四七%、㊦四四%
- ㊦研修の機会をつくる。㊦と全く同数
- ㊦共修理念の確立。㊦三八%、㊦四三・七%、㊦四一%
- と回答は、この四つの対策に集中しており、特に、共修の教育内容を示してほしいという意向がきわめて高いことが知られた。
6. 運動をすすめる上での要望をどうぞ裏面に。
- と求めたところ、多数の回答者が紙面いっぱい個人の見解を熱心にのべ、その熱気に圧倒された。ABC別に前と重複しない主な意見を紹介すると左記の通りである。
- ☆(実施中グループ)
- ・情報交流ほしい(中)
- ・技術科の共修は容易だが、家庭科となる
- と困難が大きい。(中)
- ☆(賛成グループ)
- ・共修の経験のなかで成果あった(中)
- ・共働きも増加、別修の必要なし(中)
- ・生活科と呼称かえてイメージチェンジを。
- ・他教師、父母の意識調査も必要(中)
- ・現在の問題解決が先決(中)
- ・人間科学として新しい構想を(高)
- ・生産から消費全過程にわたる学習で自立して生きてゆく力をつけること(高)
- ・共修のテキストをつくってほしい(高)
- ☆(どちらともいえないグループ)
- ・技・家の分離が先決(中)
- ・入試制度の改善なくしては無理(中)
- ・内容に不安、教科論として成立するか?
- ・教科書が天下りでは駄目(中)
- ・技能伝承でなく人間形成を(高)
- などであった。
- 以上の結果から、
- 一、教育課程の改訂と内容の検討および教育条計の整備と充実は、共修を実現するための三本柱であって、どれも欠かせない要件で

あることがわかる。

二、共修実現への途はけわしいが、このことはまた、教育民主化への一里塚でもあるこ

賛同者のアンケート調査から

この運動をさらに大きく強力にしていくなはどうしたらいいか、5月15日に賛同者の方全員にアンケートを送り御意見をうかじった。内容は①お知り合いで賛同者になってくれる人の紹介②あなたの現場でどんな運動ができるか③共修問題を扱ってくれるマスコミ・ニコミの紹介④あなたの賛同理由⑤今後の運動のすゝめ方についての御意見などである。現在もまだポツポツ寄せられてくる段階であるがこれまでの集計を報告する。①に関して は新たに六七名の賛同者の紹介を得た。なかには数人の友人を紹介して下さった賛同者もあるが特長としては地方在住の賛同者がふえたことである。②については周囲で話し合うことができる。(17) ③自分の知り合いの報道機関の紹介(8) 署名運動ができる(15) カンパができる(11) ⑤労力を提供できる(7) などになっている。

とが改めて確認される想いであった。

(文責 和田)

紹介された賛同者の方には同じアンケートを送って現在回収中である。また機関誌やミニコミ雑誌などは発起人を中心に接触し、手分けして書いている。④の賛同理由について少し詳しく紹介すると、家庭は男女ともて営むものであるからという当然派と、過去の自分たちが男女差別教育としての家庭科を学ばせられたことへの批判としてのものが多いが、それらをもう少し整理した形のものとして男女分業論批判がある。「二〇年間の記者生活でさまざまな婦人問題を扱かうちに男女差別の根はかつての「家」国家」を基盤として現在にひきつぐ男女分業体制にあると実感している。それを切り崩すことが家庭科の男女共修にあると思う。」（島田とみ子氏）「特性として、歴史的経済的な役割分担を固定化してしまふことは男にとっても女にとっても不幸、なぜならどちらもその可能性や自己の

欲することを制約されるから。一つが固定化され、ばもう一方は必然的に固定化される。」（木村温美氏）「これからの新しい家庭観をわれわれ自身の手によって創造してゆくためには男女によらず経済的ないし生活者としての自立が必要である。」（藤井治枝氏）男は共修問題をどう考えているのであろうか。「私は中学にあたる期間を軍の学校で過ごし洗濯でも何でもやってきてよかった。現在も家庭のことも適宜にひきうけ、一応はこなせます。」「義務教育」の問題として共修に賛成。」（大野明男氏）「家事は天職という考えが女性のみでなく男性をも苦しめている。」（水田珠枝氏）さらに人間の学として当然とする人たちの意見の中に「生活と生存のために男女を問わず生活労働できるのは当然。男性をこれ以上無能の上に安住させてはいけない」（寛久美子氏）などがある。しかし現実は大へんきびしい。ながい現場教師の経験から「現状では男性に関心を持って貰うことすら殆んど望めないようである」（大和マサノ氏）という意見も寄せられている。

⑤ それでは具体的に運動をどうすすめていくか——これまで関係者との話し合い、集会の開催、ニュースの発行、現場教師のアンケー

ト、カリキュラム研究などつづけてきたが——寄せられた意見は①家庭科関係者への周知をもっと徹底させること、②保守派といわれる人たちとっと接触を、PTAや主婦へのくい込みを積極的に行うよう、③現在の家庭科の体質改善についての理論的な研究などに大きくわけられるようである。

「何よりも男女共学を志す現場教師が自己

の実践をしながらまわりの人たち（教師父母）を説得していくことが大切。（高木葉子氏）「それには旧来の家庭科の体質をどう改めたらよいか会員相互の意見交流をしたい」（尾藤操氏）「研究されたカリキュラムを公けの場で提示すれば無関心派の啓蒙にもなるのではないか。」（大和マサノ氏）またこんな意見も寄せられた。「この運動が巾広い層の

人たちの支持をうけて出発したことはよかった。単なる高校家庭科の問題として女教師がキリキリ舞いしても状況はひらけない。巾広い職業人、男性の人たちの意見もいれて、大げさに云えば国民的課題として考えられるまでに発展させたいものだと考えます。」（押切郁氏）（島田）

関係の方々を訪ねて

関係当局の意向を知り、共修の必要をうたえるため、発起人は数名づつ、文部省、東京都の関係者を訪問して話し合いを続けます。

七月半ばまでに話し合えたのは、次の方々です。

- ・三月二九日 高部和子氏 東京都高等学校家庭科指導主事
- ・五月二五日 松尾倭文子氏 教育課程審議会委員
- ・六月二六日 齋藤尚夫氏 文部省初等中等局職業教育課長
- ・七月六日 兼信英子氏

東京都中学校家庭科指導主事 豊田 昭氏
教育課程審議会委員 吉田元定氏
教育課程審議会委員 七月一六日

教育課定審議会で、今、どんな風に審議がすすめられているか、これからはどんな予定なのか——それが一番私たちの知りたかったことでした。けれども、審議の内容は公開できないということ、具体的なことは伺えませんでした。でも、知識のつめこみになってしまっている今の教育についての反省はされているように

日誌メモ

- ☆3・3 朝日（大阪）若者らんに「家庭科を男女共修に」反響早速現われる
- ☆3・5 各都道府県教育委員会及び、特別市家庭科担当指導主事にアンケート調査発送
- ☆3・21 高校の家庭科の教諭に「中・高家庭科の男女共修について」アンケート調査返送
- ☆4・25 婦人民主新聞「男女共修の家庭科」が目ざすもの 中嶋里美
- ☆4・8 発起人会（6PM/10PM）於婦選会館ニュース161放送
- 賛同者にどういふ協力ができるかアンケートをとることとする。
- ☆4・15 大阪放送のインタビューに中嶋里美応じる。
- ☆4・20 第二回会合出席者七五名

で、実践的態度を身につける教育、手を動かす教育を重要視すべきではないかということが問題になっているそうです。

従って、職業科と並んで、家庭科も重要視される可能性はあるわけですが、普通課程の高校で職業科の時間を設けるところが自然に減って来てしまった実態を考えれば、それと逆のことをしようとしてもうまく行くかどうか疑問もあるとのこと。また、教科を減らすことが要請されている今、必修をふやすことがいかにどうかも議論になるでしょう。

けれど、こうして家庭科がいつも職業科と並べ論じられることも、家庭科にとっては問題だと云えそうです。家庭科は「産業教育」のひとつと位置づけられ、文部省初等中等局の中でも、職業教育科で扱われることになっているわけですが、実践的であるという共通部分はあっても、「生活」を扱う教科として、もっと独自のあり方が考えられてよいのではないのでしょうか。

「手」の教育の重視という立場からは、「社会科のような家庭科になってしまったら意味がない」ということで、共修への危惧があらわれて来ます。「生活」という視点で、知識、技術、考え方がまとめられて行けばよ

いと思うのですけれど。

共修では実習ができないなどということはないといえ、男の子に料理をやらせるのか」という疑問が返って来ます。「女子特性論」の根拠を強くつくづく感じないでいられません。

男子ももっと生活のことを学ぶ必要があるという点では、殆んど異論は出ないのですが、「それでも、全く男女いっしょにできるのだろうか」「将来の家庭生活を考えれば、やはり、女子に必要性が大きいのではないか」ということが出て来てしまっています。

また、「女子の特性が社会から認められて来たからこそ、家庭科は今のようになたにされたのだ」と、指導主事さんは現状を肯定されます。

「生活」について学ぶための、男女ともに必要な教科と考えてこそ、家庭科の存在理由があると思っていきたいものですが。そして、話し合いの中で感じられたことは、強い世論の盛り上がりがあれば、前進は可能だということでした。

（梶谷）

- ☆4・20 釧路新聞・南海日日新聞・日本海新聞（4・21）・北海タイムスに「家庭科を男女一緒に」（共同通信提供）
- ☆4・23 サンケイ新聞 家庭科の男女共修は……先生ほとんど賛成
- ☆4・25 栃木新聞「家庭科を男女一緒に」（共同通信提供）
- ☆4・26 公明新聞 家庭科を男女いっしょに
- ☆5・3 発起人会（10PM/6PM）於梶谷実母宅 各地の男女共修のカリキュラムを集め、資料を作ることなどをきめる。
- ☆5・10 「交流」5月号に「男女共修の家庭科」をすすめる私の考え」中嶋里美
- ☆5・15 東京新聞 生活の学問として「家庭科の男女共修を」——会の実践報告から——
- ☆5・16 賛同者へアンケートの発送とカンパ依頼
- ☆6・10 発起人会（第三回会合の打ち合わせ案内状発送・陳情書等の検討）
- ☆6・22 第三回会合「男女共修の家庭科の実践報告と討論集」出席者八五名
- ☆6・25 教育の泉 家庭科を男女共修に「共修をすすめる会」がスタート

（梶谷）

会の宣伝活動：…これまで…

☆集会でアピール

☆ピラまき

☆署名あつめ

家庭科の男女共修をすすめる運動を多くの

人に知ってもらうために発起人の時間と労力

が許す限り宣伝活動が続けてきました。この

夏も母親大会をはじめ、各地で開催される集

会や大会へ仕掛け訴えたいと思います。家庭

科の男女共修をすすめる運動のアピールが出

来たり、ピラまき、署名活動が出来る集会等

をご存知の方は是非あてこ一報下さい。ま

た共に行動していただけたらうれしく思いま

す。さらにこの運動が東京以外の地でも広く

行なわれることを望んでいます。ピラまき等

の労力を提供していただければ、全国各地い

ずれの所にも、アピール文、署名、カンパ用

紙をお送り致しますので、是非ご協力下さい

左記のものは三月以降の活動報告です。

☆3・24 優生保護法改悪に反対する千人集

会でアピール、幡ヶ谷区民会館

(中嶋)

☆3・30

世直し大集会、代々木公園、ピラ

まき(佐藤、青木、落合、馬場、

中嶋)

☆5・4 婦人民主クラブ「女性解放の視点

をさぐる」千駄ヶ谷区民会館、ア

ピール、署名活動(梶谷、落合、

中嶋)

☆5・11 第一九回はたらく婦人の中央

集会(総評系)ピラまき、署名活

動(梶谷、馬場、松本、坂本)

☆5・18 消費者連盟結成会 署名活動

アピール(梶谷)

☆5・19 第一九回はたらく婦人の中央集会

(婦団連系)法政二高、ピラまき、

署名活動(梶谷、馬場、坂本、中

嶋)

☆6・28 東京都高校家庭科教育研究会

運動の紹介(和田)

☆7・6 大学家庭科教育研究会

署名活動(佐藤)

☆7・7 家庭科教育学会

ピラまき(佐藤)

☆7・8 消費者大学

運動の紹介(樋口)

(中嶋)

☆6・29

賛同者の紹介による方々へ会の賛

同依頼とアンケートと発送(梶谷)

☆7・6 ニュース紙2の打ち合わせ(樋口

宅)

☆7・9 要望書案の検討・一問一答式資料

の「問」に関する案を持ちよる。

☆7・11 サンケイ新聞「家庭科の男女共

修」文京高校の場合」

会 計 報 告

49.6.30現在

収 入 の 部		支 出 の 部	
・発起人拠出基金	80,000	・通信案内費	74,940
・カンパ	320,678	・印刷代	77,850
・ニュース購読料	10,000	・講演料・行事費	23,000
・ニュース売上代金	3,950	・事務用品費	9,065
・その他	26,200	・その他	17,500

計 440,828 計 202,355

差引現在高 238,473 円(残額は資料作成費に使用します)

振替口座番号
東京 一八八九一
家庭科の男女共修をすすめる会